

SESSION 2024

**AGREGATION
CONCOURS EXTERNE**

**Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES**

VERSION SUIVIE D'UN COMMENTAIRE GRAMMATICAL

Durée : 6 heures

Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions ou, à la place de ce dernier, Dictionnaire Shinsen kanwa jiten, Shôgakukan, 1983 et rééditions. .

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique (y compris la calculatrice) est rigoureusement interdit.

Il appartient au candidat de vérifier qu'il a reçu un sujet complet et correspondant à l'épreuve à laquelle il se présente.

Si vous repérez ce qui vous semble être une erreur d'énoncé, vous devez le signaler très lisiblement sur votre copie, en proposer la correction et poursuivre l'épreuve en conséquence. De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, vous devez la (ou les) mentionner explicitement.

**NB : Conformément au principe d'anonymat, votre copie ne doit comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé consiste notamment en la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de la signer ou de l'identifier.
Le fait de rendre une copie blanche est éliminatoire**

Tournez la page S.V.P.

1. Traduisez en français le texte ci-dessous (extrait de 燗泉光『燗の燗』中央公論新社、2018年)

2. Décrivez et analysez les occurrences du mot *もの* qui apparaissent dans le passage à traduire.

mono

笹宮伯爵は、中庭のある母屋と洋館のほかに、離れ家が母屋の北側に楠の大木を挟んで建つ。これはかつて惟佐子の産みの母の崇子が住み、継母の瀧子が長らく逼塞を余儀なくされた平屋の日本家屋で、瀧子が洋館に移って「空き家」になったものを、笹宮伯爵が「執務室」に使うことを思い立ち、近頃では接客もだいたいそこで行う。震災にも倒れなかった離れ家は、母屋と渡り廊下で結ばれておらず、外線電話も厨房もなかったから、なにかと不便ではあったけれど、瀧子の趣味で畳の上に波斯絨毯を敷いた和風モダンの内装を伯爵は気に入って、と云うより、絨毯に合わせ詭えた紫檀の食卓やら黒皮革の応接組椅子やらの北欧製家具類を、コロニアル様式の洋館には向かぬと、瀧子はすべて置き去りにしたから、使わねば惜しいとの気持ちが生じたのに加えて、南面に傲然立ちほだかる楠の陰になって昼日中でも仄昏い隠れ家ぶりの行まいが密談に相応しく思われ、このことも伯爵の気に入っていた。むしろ瀧子がここを牢獄に思いなし、嫌ったことは云うまでもない。

母屋の勝手口から下駄を履いて離れ家まで歩いた惟佐子が、かつて瀧子が居間にしていた、十畳間二つを打ち抜いた「執務室」へ入っていくと、和服姿の笹宮伯爵は、十脚の椅子が楽に並べられる紫檀の食卓ではなく、硝子戸縁側の応接椅子で独りウイスキーを飲んでた。女中が二人、卓の食器や灰皿を片付けているところからして、ついしままで来客があつたらしい。十年前に貴族院議員に選

出されて以来、ことに満洲事変からこちら、笹宮伯爵が家において来客のない日はほとんどなく、その大半が政治的野心を抱く伯爵の下に蟬集する同志や情報通との密謀——は云い過ぎにしても、ただの気楽な酒食でないのは少なくとも間違いなかった。

当年五十三歳になる笹宮伯爵の夢は、内閣首班の大命を受けた自分がこの「執務室」で組閣名簿を作成する、これである。母屋の座敷や庭に張られた天幕の下、大勢の新聞記者らが待機し、あるいは慌ただしく出入りするなか、この奥まった場所で、腹心の者らと鳩首して名前を書き出しては消し、消しては書き入れる。そのときここは、屋敷内の、ではなく、帝国政治の深奥の地となる——と、もちろんこれは文字通りの夢、ただの夢想にすぎなかった。

笹宮惟重に大命が降下するなどは、日本の政体がいかに変転をとげようとも、万に一つもありえず、そんなことになったら日本はおしまいだと考える程度の分別は笹宮氏にもあつた。けれども「執務室」で組閣を行うこと、すなわち自らが主導して閣僚人事を吟味すること自体は、現実的な野望の射程に入っており、このところの密談はこの目標に沿うものであつた。振り付けるべき人物のめあては早くからあつた。目まぐるしく変転する政治外交の賽の目に翻弄されながらも、粘り強く企謀の荒地を開墾した結果、苗から育った樹木が枝を張りつつあるのを眺めれば、千年を超える永きにわたり、京にあつて皇室を守護奉つてきた血筋の末裔たる自分には、表に立たぬ黒子の振舞こそが相応しいのだと得心できるものがあつた。

笹宮家は公家のなかでは中位に属する羽林家の家格で、笹宮氏の祖父が明治十七年に子爵を叙爵した。香道を伝える家と云うことで、御一新後も京にとどまっていたが、二代目子爵の笹宮惟治が軍人となつて、日清戦役で武勲をあげて退役した後、山県有朋公の懐刀として京都府知事や内務省次官、枢密院書記官長などを歴任した功あつて、明治四十年、同い年の乃木希典將軍が男爵から伯爵へ陞

爵したのと同じときに、子爵から伯爵へ陞爵した。

しかし笹宮家にとっては、家格の上昇より以上に、当主が権力の中核近くにあることのもたらす利得が大きく、北海道の採炭や信州の山林開発など、複数の国家事業への投資でもって、京都時代は六百石の家禄にすぎなかった家産の数百倍の財を得るに至った。現在の当主、笹宮惟重が大正の初めに襲爵したときには、大名華族には及ばぬものの、総して貧乏な堂上華族のなかで笹宮家は抜きん出た資産家となっていたものを、大正から昭和、華族三代目たる笹宮惟重伯爵がこれを徐々に食い潰し今日に至るわけである。

笹宮氏の母親、すなわち惟佐子の祖母であり瀧子の仇敵であった藤乃は、家内を専断に支配したが、統制の及ぶ範囲は「奥」に限られ、「表」向きには口を出さなかったから、惣領息子が資産をすり減らすのを放置する結果となったのは手ぬかりであった。その一方で、崇子が惟佐子を産んで死んだ後、神戸の資産家の末娘である瀧子との縁談を主導したのは藤乃であり、同じ因西出の公家からみたらほとんど匹夫下郎とも云うべき、格では問題にならぬ家から、しかも不良の評判のある娘を後妻として迎えるに躊躇しなかったあたりの眼力は、さすがは戦国下剋上の世にのし上がった大名家の末裔だけのことはあると人々は噂した。実際、瀧子はいまや笹宮家の「生命線」であった。もしそれがなかったなら、昭和初年の金融恐慌で打撃を受けた笹宮伯爵家は、先代が廻町に構えた家屋敷を失うまでの凋落に陥る可能性すらあったのである。

促されて惟佐子が斜向いの椅子に腰を下ろすと、父伯爵はウイスキーのあてにスルメを噛みながら用件を伝えた。

「わざわざすまないんだが、惟佐子さんに、またちよっと筆記をお願いしたいんだよ。少し時間はありますかね？」

父親が娘を呼ぶのにさん付けするのは一種の冗談なわけだが、数年前、生まれて以来ほとんど接触することのなかった女の子が、幼虫から蝶に変態して目の前に現れたとき、美しい娘になったものだと感嘆に加え驚愕したのは、姿形が死んだ先妻と瓜二つだったからで、照れくさいような不安なような気持ちになった笹宮氏は、思わず冗談めかして「惟佐子さん」と娘に呼びかけて、それ以来ほかの呼び方ができなくなった。叱ったり（の機会はほとんどなかったが）意見をしたりするときは、呼び捨てにすべきなのは承知していたけれど、娘と二人、面と向かい合ると、気圧される具合となって、自分の存在そのものが冗談であるかのような、落ちつかぬ気分にはなるのだった。

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie.

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
EAE	0430A	104	0330